

## ホースセラピー体験スポット、山形にオープン

やまがた  
ニュース 解説

報道部  
瀬野 麻衣

国内では少なくとも1970年代から実践している団体があるという。長野県の小学校、青少年の健全育成を目的とした東京都の公益財団法人、不登校の

乗馬協会（東京都）の滝坂信一理事長によると、国際的には障害者乗馬や治療的乗馬と言われ、英国やドイツ、米国など欧米で馬の活用が盛んだ。治療とは医療、教育、心理などの領域での活用を指す。

顔を寄せてくる馬の体をなでていると、温かく包み込まれるような感覚になる。そんな不思議な力を持つ馬と触れ合える場「うまのすけcafe」（高橋千秋代表）が、山形市の蔵王みはらしの丘ミュージアムパーク内にオープンして3カ月。心身をリラックスさせる「ホースセラピー」を体験できるとあって、多くの人でにぎわっている。なぜ馬は人々を引き付けるのか。ホースセラピーについて探った。

## 触れ合い心身の癒やし

## 馬文化見つめ直す機会にも

子どもたちを対象とした栃木県の施設などで、子どもたちへの教育的アプローチに馬を活用してきた。障害者乗馬の実践例も早くからある。

高橋代表もかつて、山形市内の障害者支援施設向陽園の職員としてホースセラピーの活動に取り組んできた。脳性小児まひで寝たきりの男性が乗馬を始めて2年、1人で座位を保って馬に乗る姿など効果を目の当たりにした。

海外では医療リハビリに馬が積極的に活用されている。乗馬をした時の人間の体の揺れ方は、地上を二足歩行した時の骨盤から上の体の動かし方と同じだという。リハビリではこうし

た仕組みを生かす。「例えば、体の一方にまひがある場合、それに伴って生じる緊張をリラックスさせ、左右差のない体の動きを模倣的に作り出す」（滝坂理事長）。

治療などに馬が使われるのは「乗れる」というだけでなく、感受性豊かな馬の性質も関係する。群れで行動する馬は、群れの中の1頭が草や水の匂い、敵の匂いを察知したことを瞬時に感じ取る敏感さがある。加えて要求行動が少ないため、人は馬に対して想像力を働かせることになる。これを馬が感じ取り、人に寄り添う。こうした性質から、引き馬では馬と息を合わせることによって連帯感を感じられたり、乗馬では馬に体を任せ、心を開いたりできる。

心理や教育の領域では、こうした性質を生かして、海外では子どもたちが社会的スキルを身に付けるための実践や帰還兵のトラウマ（心的外傷）の治療などにも役立てられている。国内では児童



蔵王みはらしの丘ミュージアムパークにオープンした「うまのすけcafe」。県内外から多くの人が訪れている。山形市

養護施設で馬を活用している例があるという。

海外と比べると、国内はまだ実践団体や活用例は少ない。それだけに、うまのすけcafeの存在は貴重だろう。高橋代表は山形新聞社のクラウドファンディング「山形サポート」で開設に向けた資金を募った。同所にはポニーのロイが1頭おり、餌やりなどの触れ合いのほか、18日から乗馬を始めた。月1回、最上町の前森高原の大きな馬に乗ることができるとも設けている。滝坂理事長は「短時間の引き馬や乗馬でも、馬という動物のもたらしてくれる効果を得ることができる。そこに馬がいるだけでもほっとできる」と話す。

cafeには県内外から老若男女が訪れる。「ロイちゃん」と毎日声を掛ける近所の人、「昔は馬がいっぱいいったっけね」と懐かしむお年寄りもいる。悩みを抱えた人は2、3時間、ロイを眺め、笑顔で帰っていくという。計2日間実施した乗馬体験には延べ約200人が参加した。

「馬頭観音やギリシャ神話のケンタウロスなどがあるように、古くから人は馬との精神的交流が成り立つと感じていたのだろう」と滝坂理事長は指摘する。かつて馬は身近な存在だったが、機械や交通の発達に伴い、今は少し遠く特別な存在となった。cafeのオープンをきっかけに、ホースセラピーの効果を感じるだけでなく、馬文化を見つめ直す機会にもなるという。